

## 「新版歌祭文」野崎村の段 詞章

(引用は、日本古典文学大系『浄瑠璃集 下』(岩波書店、1959年)を基本に、今回の上演に合わせて適宜修正した。聞き所の箇所は**赤の太字**で示している。また旧字は通用字体に改め、句読点や漢字、送り仮名、会話文の「」、語注の○などを読みやすさのために適宜加筆・修正した。会話文の「」冒頭には話者の名前を入れた。)

引き立て、入りにける。跡に娘は気もいそく

お光「日頃の願いが叶うたも。天神様や観音様。第一は親のおかげ。エ、こんな

事なら今朝あたり、髪も結て置こうもの。鉄漿(かね・お齒黒のこと)の付け様。

挨拶も、どう言うてよかろやら」

覺束なます拵えも、祝う大根の友白髪。末菜刀と気もいさみ、手元も軽ふ、ちよき  
くく切ても切ぬ恋衣や。

本の白地をなま中に。お染は思い久松が。跡をしとうて、野崎村。堤伝いに漸と。  
梅を目当てに、軒のつま。供のおよしが声高に。

およし「申し、ご寮人様。かの人に逢おうばかり、寒い時分の野崎参り。今、船の上がり場で、教えて貰うた目じるしの此梅。大かた爰で、ござりましょうぞえ」

お染「アアコレ、もそっと静かに言やいのう。久松に逢いたさに、来事は来ても在所の事。目立ては気の毒、そなたは船へ。サ、早うく」

と追いやりく。

お染「ものもう、御頼み申しましょう」

と言うもこわく暖簾ごし。

お光「百姓の内へ改まった。用が有るなら、はいらしゃんせ。」

お染「ハイく。卒爾ながら、久作様は内方でござんすかえ。左様なら、大坂から久松という人が、今朝戻って見えた筈。ちよつと逢わして下さんせ」

という詞つきなり形。

お光「常々聞いた油屋の、扱はお染。」

と愠気の初物、胸はもやくかき交ぜ膾、まな板押しやり、戸口に立寄り、見れば見る程

お光「エ、美しい。あた可愛らしい其顔で、久松様に逢わしてくれ。そんなお方は、

こちゃ知らぬ。余所を尋ねて見やしゃんせ。あほうらしい」

と腹立ち声。心付かねば、

お染「ホンニまあ、何ぞ土産と思つても、急な事。コレく女子衆、さもしけれども、是なりと」

と、夢にもそれと白玉か、露（小粒の銀貨・露銀の略）を帛紗に包みの儘、差し出せば。

お光「こりや何んじゃえ。大所のご兩人様。様々々と言われても、心が至らぬ置かしやんせ。在所の女と、侮つてか。ほしくばお前にやるわいな」

とやら腹立ちに門口へ、ほればほどけて、ばらくと。草に露銀、芥子人形。微塵に香箱割れ出した。

中へ、つかく親子連れ、出てくる久作。

久作「どうじゃ、膾は出来たであろう。扱祝言の事、婆が聞いてきつい喜びじゃが、

年は寄るまいもの。さっきの、やつさもつさで、取りのぼしたか、頭痛もする。

いこう肩がつかへて来た。ア、橙の数（年の数）は争われぬものじゃわいの。」

久松「左様なら、そろくわたしが、揉んで上げましょうか」

久作「ソリヤ久松、忝い。老いては子に従えじゃ。孝行にかたみ恨みのない様に。

コリヤお光よ。三里をすえてくれ。（三里にお灸をすえてくれ）」

お光「アイく。そんなら風の来ぬ様に」

と、何がな表へ当たりまなこ。門の戸ぴっしやり、さしもぐさ、

久作「サアく、親子じゃとて遠慮はない。艾もけんぴき（あんま）も大掴みにや  
つてくれ。」

久松「アイく、きつうつかえてござりますぞえ」

久作「そうであろうく。次いでに七九（背中のツボ）をやったも。ワット、こ  
たえるぞく。」

お光「サア、据えますぞえ」

久作「アツく、えらいぞく。明日が日死うと、火葬は止めにして貰いましょ  
う。丈夫に見えても、もう古家。屋根も根太も、こりや一時に割り普請じゃ。ア  
ツくくく。」

お光「ヲく、とと様の、仰山な。皮切りはしまいでございんす。ほんに風が当たる  
と思や、誰じゃ表を明けたそうな。閉めてさんじょ」

と立つを引きとめ。

久作「ハテよいわいの。屋中にうっとしい。ノウ久松くく、コリヤ久松。よそ  
見ばかりしていずと、しかくと揉まぬかいの。」

久松「サアよそ見はせぬけれど、エ、覗くが悪い。折りが悪い、悪い。くくく」と目顔の仕方。

久作「や、悪いの覗くのと。足に灸こそ据えていれ、どこもお光は覗きはせぬ。」

久松「サア、アノ、悪いと言いましたは、確かに今日は、瘰癧日（うんこうび、灸を据えるのを忌む日）。それに灸は悪いくくく、と言ったのでござります。」

久作「エ、愚痴な事を。この様に達者なは、ちよこく灸すえ、作り（農作）をする。そこで久作。アツ、。エ、何じゃわい。わがみ達も、達者な様に灸でもすえるのが、おいらへの孝行じゃぞや。」

お光「ヲ、そうでございんすとも。久松様には、振袖の美しい持病が有って、招いたり、呼び出したり。にくてらしい。アノ病いづらがはいらぬ様に、敷居の上へ、大きゅうしてすえて置きたい。」

（後世に久作のセリフ「アツイくお光、なにするぞいく。そこは頭じゃがな、く、コリヤ、頭に三里があるかいいい、ア、トットモウ、えらい目にあわすがな、ハ、ハ、ハ」の増補あり）

久松「コレお光殿。振袖の、持病のと。色々の耳こすり。はしたない事、聞ては居ぬぞや。」

お光「ホ、ハ、ハ。かわった事がお気に障った。」

久松「ヲ、障らいじゃ」

お光「こりゃ、おかしい。其訳、聞くぞえ」

久松「言うぞや」

と、我を忘れていさかいを、外に聞く身の気の毒さ。振りの肌着に、玉の汗。久作

も持てあつかい。

久作「ア、コリヤ、肩も足もひりくするが。く。まだ祝言もせぬ先から、女  
夫いさかいの取り越しかい。灸業のかわり、喧嘩の行事さすのかいやい。二人な  
がら、嗜めく」

お光「イエく、構ふてくださすな。今の様なあいそづかしも、病いずらめが言  
わしくつさる」

久作「何を言うやら、モウく、両方とも。おれが貰いじゃ。ヨ、ヨ、中なおしが  
直ぐに取り結びの盃。髪も結うたり、鉄漿も付けたり。湯もつかうて、花嫁御を、  
コリヤ、作っておけ」

とうち笑い。無理に納戸へ連れて行く。

その間遅し、とかけ入るお染。

お染「逢いたかった」

と久松に、縋り付けば。

久松「ア、コレ、声が高うござります。ガ、思いがけない。爰へはどうして、訳を  
聞かしてく」

と、問われて漸う顔を上げ、

お染「訳はそちに覚えがあらう。私が事は思い切り山家屋へ嫁入りせいと、残して

おきやったコレ、此文。そなたは思い切る気でも、わしゃ、なんぼでも、え切らぬ。

あんまり逢いたさ、なつかしき。もったいない事ながら、観音様をかこつけて、逢

いに北やら南やら、知らぬ在所も厭いはせぬ。二人いっしょに添うなら、飯もたこ

うし、織りつむぎ、どんな貧しい暮らしでも、わしゃ。嬉しいと思うもの。女の道

を背けとは。聞こへぬわいの、胴欲」

と。恨みのたけを友禪の、振りの袂に北時雨、晴れ間は更に、なかりけり。

曇りがちな久松も、背撫でさすり、声ひそめ。

久松「そのお恨みは聞こえてあれど、十の年から今日が日まで、船、車にも積まれ

ぬ御恩、仇で返す身の徒。冥加の程も恐ろしければ。委細は文に残した通り。山

家屋へござるのが、母御へ孝行、家の為。よう、得心をなされや」

と言えどいらえも涙声。

お染「いやじゃ〜。わしゃ、いやじゃ。今となってそう言やるは、是までわしに

隠しちゃった。いいなずけの娘御と、女夫になりたい心じゃの。是非、山家屋へ行

けならば、覚悟はとうから究めて居る」

と。用意の剃刀取り直せば。

久松「夫れは短気」

と久松が、留めてもとまらず。

お染「イヤ〜。そなたに別れ片時も、何楽しみに生きて居よう。とめずと、

殺して〜」

と、思い詰めたる其風情。

久松「そんなら是程申しても、お聞き訳はござりませぬか」

お染「添われぬ時は死ぬるといふ、誓紙に嘘がつかりようかいのう」

久松「ハア、たつて申せば主殺し。命にかえて、それ程までに。」

お染「思うが無理か、女房じゃもの。」

久松「叶はぬ時は、私も一緒に。お染様」

お染「久松」

と互いに手に手取りかわす、悪縁深き契りかや。

始終後ろに立ち聞く親。

久作「その思案悪かろう」

と。言われてはっと久松、お染。さわぐを押さえて。

久作「ア、大事ない／＼。マア／＼下にいや。因縁とは言いながら。和泉の国石津の御家中。相良丈太夫様という、れこさの息子殿。いささかの事で家が潰れてから、わがみの乳母はおれが妹。その縁で、十の年まで育てあげた、此久作は後の親。草深い在所に置こより、知恵付けの為、油屋へ丁稚奉公。夫程までに成人して、商いの道、読み書きまで。人並みになったは、コリヤ、親方の大恩。若い水の出端には。そこらの義理もへちまのかわと、投げやって、こな様といつまでも、添い遂げられるにしかからが、戸は立てられぬ世上の口じやわい。エ、アノ久松めは、辛抱した女房嫌うて、身上のよい油屋の髻になったは、コレ、栄耀がしたさじや、皆欲じや。人の皮着た畜生め、と。在所はもちろん大坂中に、指さされ、人交わりが、なりましようかいの。コレ／＼／＼爰の道理を聞き分けて、思い切つて下され。申し、コレ拝みますわいの／＼。是程言うても返答のないは、コリヤ二人ながら不得心じやの」

久松「ア、もつたない。実の親にも勝った御恩。送らぬのみか苦をかけるも。私が不所存から。」

お染「イヤ／＼、そなたの科ではない。皆、此身のいたずらから。親にも身にもかえまいと、思い詰めても、世の中の。義理にはどうも、かえられぬ。成る程、思い

切りましょう。

久松「ヲ、よう御合点なされました。わたしもふつつり思い切り、お光と祝言致しまする。」

お染「そんならそなたも。」

久松「お前も」

と、互いに目と目に知らせあう。心の覚悟は、白髪の親仁。

久作「アノさっぱりと、思い切って、祝言をしてたもるか」

久松「なんのうそを申しましょう」

久作「娘御も今の詞に、微塵も違いはござりませぬか」

お染「久松の事は是限り。わしや、嫁入りをするわいの」

久作「ヲ、出来たく。むくつけな親仁め、と腹も立てず、よう聞き入れて下さ

りました。晩の間のしれぬ婆が命。息のあるうち、祝言が済んだと聞かして下さい

るが、大きな善根。善は急げじゃ。お光。くくく」

と、尻軽に、立って一間を差し覗き。

久作「ハテ、出くすみをしているは、それでは果てぬ」

と手を取って、

久作「サアくマアく、嫁の座へ直ったりく。エ、トキニ、一家、一門、着の

ままの祝言に、あらたまった綿帽子。うっとしかろう、取ってやろ」

と。脱がすはずみに、笄も。ぬけて惜しげも、投げ島田。根よりふつつと、切り髪

を。見るに驚く久松、お染。久作あきれて

久作「こりやどうじゃ」



と。言う口押さえて。

お光「コレ申し、とと様も、おふたり様も。なんにも言うて下さんすな。最前から何事も、残らず聞いておりました。思いつつたと言わしやんすは、義理にせまった表向き。底の心はお二人ながら、死ぬる覚悟でござんしょうがな。サ、死ぬる覚悟で居やしやんす。かか様の大病、どうぞ命が取りとめたさ。わしゃ、もう、とんと思いつつた。ナ、切つて祝うた髪かたち。見て下さんせ」

と両肌を、脱いだ下着は白無垢の、首にかけたる五条袈裟。思いつつたる目のうちに、  
**浮かむ涙は水晶の、玉より清き貞心に**

今更なんと詞さえ、涙呑み込み、のみ込んで、こたゆるつらさ、久松、お染、久作も手を合わせ。

久作「なんにも言はぬ、この通りじゃくく。エ、女夫にしたいばかりに、そこらあたりに心もつかず、苔みの花を散らしてのけたは。皆、おれが鈍なから。ゆるしてくれ」

も口の内。聞こえ憚る忍び泣き。

お光「ア、。冥加ない事おっしゃります。所詮、望みは叶うまいと、思いの外の祝言の、盃する様になって、嬉しかったは、たった半時。無理に私が添うとすれば、死なしやんすをしりながら、どう盃がなりませうぞいな。」

四人の涙八つの袖。榎並八ヶの落し水、膝の、堤や越しぬらん。久作、涙押しぬぐい。

久作「どうやら、こうやら、合点がいたそうな。さぞ母御様が、案じてござろう。

大事の娘御、たしかな者に」

お勝「イヤそれには及びませぬ。母がたしかに請け取りました」

と言いつつはいれば、

お染「ヤアかゝ様。ハアはっ」

とばかりに詞なく、さし俯けば、

お勝「コレく、お染、野崎参りしやった、と、聞いてあんまり氣遣いさ。アイヤ  
氣慰みによかろうと、跡追うて来て、何事も残らず聞いた。夫婦の衆の深切、お

光女郎の志し。最前からあの表で、わしゃ拜んでばかり、いましたわいのう。

サア、観音様のご利生で、怪我過ちのなかつた嬉しさ。是から直ぐにお礼参り。

幸いわしが乗ってきた、あのかごで、コレ久松。そなたは堤、お染は船。別れノ

ゝにいぬるのが、世上の補い、心の遠慮。」

久作「左様でござりまするとも。お志じゃ。乗っついていや。」

お勝「娘は、船へ」

と親々の、詞に、否も言いかぬる。鴛鴦の片羽の片“く”に、別れて、二人は乗り  
移れば。

お光「あにさん、おまめで、お染様、もうおさらば」

と、詞まで早、改める、お光尼。哀れを余所に、みなれ竿、

久松「船にも積まれぬ、お主の御恩。親の恵の冥加ない、取り分けてお光殿。こう

なりくだるも先の世の、定まり毎と諦めて、お年寄られた親達の介抱頼む」

と言いさして、泣くね伏せ籠の、面ぶせ。船のうちにも声上げて、

お染「よしないわし故、お光様の、縁を切らしたお憎しみ。堪忍して下さい」

お光「ア、わっけもない、お染様、浮世放れた、尼じゃもの。そんな心を勿体な

い。短気起こして下さんすな。」

久作「ヲ、く、娘が言う通り、死んで花実は咲かぬ梅。一本花にならぬ様に、めでたい盛りを見せてくれ。随分達者で」

久松「ハイく、お前も御無事で」

久作「お袋様もお娘御も、おさらば。」

さらば。さらば。くくも遠ざかる、船と。**(三味線の間奏入る)** 堤は隔たれど。

縁を引く綱一筋に。思いあうたる恋中も、義理の柵、情けのかせ杭、かごに比翼を引きわくる、心“くぞ、世なりけり。